

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』 について：天理図書館蔵『おもろさうし』 巻十、解説と校異・翻刻

末次，智

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

459

(終了ページ / End Page)

496

(発行年 / Year)

2023-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00030089>

ニコライ・ネフスキー旧蔵『おもろさうし』について

——天理図書館蔵『おもろさうし』巻十、解説と校異・翻刻——

末次 智

ニコライ・ネフスキー（一八九二年～一九三七年）は、日本の民俗学の草創期に日本に滞在し、アイヌや東北地方、そして、沖縄本島、宮古島を探索したロシアの言語学者である。一九一五（大正四）年三月、二二歳でペトログラード大学派遣留学生として東京に留学する。その後、留学を終え、ロシアに帰国する予定であったが、母国でロシア革命が起り、そのまま日本に滞在することになる。その間、一九一九（大正八）年五月に小樽商業学校のロシア語教師嘱託となり、一九二一（大正一〇年）の東京滞在を経て、一九二二年（大正一一）四月、前年に開校した大阪外国語学校に初代ロシア語教師として赴任する。⁽¹⁾そして、一九二九（昭和四）年九月に三七歳で、革命後のソ連に帰国する。この時、ネフスキーが日本に、一部の資料を残し、これが天理図書館に所蔵され、「ネフスキー文書」と呼ばれていることは、加藤九祚著『天の蛇』⁽²⁾の記述や引用で、早くから知られている。

私は、一九九二（平成四）年に、天理図書館で、故嘉手苅千鶴子氏とともに、バジル・ホール・チェンバレン旧蔵の『おもろさうし』（王堂本）を見出したさい、加藤の著書をもとに、ネフスキーの資料についても図書館で問い合わせたことがあるが、そのさい、まだ資料が「未整理」だという理由で、閲覧できなかった経緯がある。今回、加藤氏の著書に増補版の「完本」があることを知り、これを機会に、ネフスキーについて再度調べていて、同図書館のホームページで公開されているチラシで、二〇一五（平成二七）年一月二二日から二九日に、「天理大学創立九〇周年記念特別展 悲劇の天才言語学者ネフスキー——自筆資料に見る軌跡——」が開催されていたことを後に知った。チラシの裏には「天理図書館では、ネフスキー生誕一二〇年にあたる平成二四（二〇一二）年に、本館が所蔵するネフスキー文書（ネフスキーが帰国直前にイソ夫人の実家に遺した、日本滞在中一四年余りの多種多様な自筆資料群）を目録化して、広く研究に供してきました。」とあり、資料が整理されたことを知った。それで、同図書館を一昨年（九月二八日）に訪れ、これらを確認した。そのさいに、「ネフスキー文書」の中に、『おもろさうし』の写本があることを知り、この写真版を手元に取り寄せ、調べた結果が本稿である。

チラシ裏の「主な展示資料」一覧を見ると、『おもろさうし』は含まれていないが、それ以外に興味深いものが含まれているのだが、とくに私が関心を持つネフスキーの「琉球研究」については、別稿を期したい。

さて、本書は同館の「ネフスキー文書」の中に含まれていた『おもろさうし』第一〇巻の写本である（ここでは仮に「ネフスキー本」と呼ぶ。以下、「ネ本」と省略する）。ただし、これは筆跡から見ても、ネフスキーの自筆ではないと思われる。書誌を記すと、縦約24・5cm、見開き約34cm（片面17cm）で、和紙（紙料不明）に毛筆で記されている。表紙は無い。同館で私が確認したさいは、一葉ずつ透明のファイルに収められていた。同館の目録には「おもろさうし第十」とある。これまで、このような写本があることは知られていない。

ここで、『おもろさうし』の写本について簡単に記しておく。現存の『おもろさうし』は、前年の首里城火災で失われたものを、一七一〇年に琉球王府が再編集した「尚家本」が沖縄県立博物館に所蔵されている。⁸⁾ また、そのさいに、これと同時に編集され、神歌主取家である安仁屋家に保管された「安仁屋本」もあつたことが知られている。しかし、こちらは沖縄戦で失われ、現在ではその行方が明らかではない。また、廃藩置県のさいに、安仁屋家本を写した「安仁屋副本」も同家が所有していたとされるが、これも沖縄戦後、その存在が明らかではない。この安仁屋副本の子本として、一八八八年から一八九二年にかけて沖縄県知事であった丸岡完爾が収集した『琉球史料』の中に『おもろさうし』（「琉球史料本」）があつたとされ、さらに沖縄県庁で写され、内務省に送られたとされるもの（「内務省本」）もあつたとされるが、どちらも存在が確認されていない。現存するものとしては、一八九三年に沖縄県尋常中学校の国語教員として赴任してきた田島利三郎が琉球史料本を写した

「田島本」が現存し、これは琉球大学附属図書館伊波普猷文庫に所蔵され、画像が公開されている。⁹⁾これには、安仁屋本、同副本との校合結果が記されており、現存しない安仁屋本の姿を知ることのできるのはこの本を通してである。同様に琉球史料本から、仲吉朝助が写した「仲吉本」があり、これも同文庫に所蔵され、公開されている。¹⁰⁾さらに、琉球史料本を首里役所長西常央が写した西本（これは存在が確認されていない）、先に触れた王堂本（第三巻のみ）、これを写した「からの舎本」（同前）がある。これらを図にすると本解説末尾のようになる。

ここで、ネ本について、池宮正治著『おもろさうし諸本校異表』¹²⁾と、外間守善・波照間永吉編『定本おもろさうし』¹³⁾をもとに、他写本との校異を記すと、煩瑣になるが、左記のようになる。ただし、濁点、読点、それに空白の校異については取り上げていない。最初の数字は巻内番号であり（全巻の通し番号は省略した）、次の数字は行番号（『定本おもろさうし』の行分けによる）を示す。なお、以下の校異には、活字本は含まれていない。

【ネフスキー本『おもろさうし』巻十、校異一覧／ネ本をゴチック体で示す】

以下、諸本を下記の如く省略して記す。「尚家本（尚本）」、「仲吉本（仲本）」、「田島本（田本）」、「ネフスキー本（ネ本）」。

また、校異のうち、一重傍線箇所は、田島本よりも上位の写本である尚家本、あるいは（田島本に示

された) 安仁屋本や安仁屋副本と類似を示している。二重傍線箇所は、ネ本のみに見られる節名である。

ネ本、表紙は、欠落している。

1ノ3 「するやに」は、尚本・仲本「するややに」、田本・ネ本「するやに」。

2節名 尚本・仲本・田本・無し。ネ本「むかしはちめからのふし」。

3の4 尚本・ア本・ネ本「やゝのみしよ」。仲本・田本「やしのみしよ」。

3ノ8 尚本・仲本・田本「よら」。ネ本「まら」。

3ノ9 尚本・仲本・田本「おくと」。ネ本「おくと」。

3ノ9 尚本「しゝと」または「しくと」とある。仲本・田本「しくと」。ネ本「しゝと」。

3ノ14 尚本・仲本・田本「ほとけ」。ネ本「ほとみ」。

4節名 尚本・仲本・田本「うちいてはおしかけふし」ネ本「うらへてはおしかけふし」。

5節名 尚本・仲本・田本「大きみきやときとやりきやふし」。ネ本「大きみぎやときとやりかふし」。

5ノ2 尚本・仲本・田本「けわいこき」。ネ本「けわい」。

6節名 尚本・ネ本「いとめつらかふし」。仲本・田本「いとあつらかふし」。

7ノ11 尚本・ア本・ネ本「てかち」。仲本・田本「てりち」。(尚本、仲本「り」とも「か」とも読

める)

8 ネ本「8一、に同じ」とあり、一首全体が省略されている。※「同じ」とは、重複している

巻1ノ31のことを指すかと思われる。

9 節名 尚本・仲本・田本「きこへ大きみちやくによせたるあちおそいかふし」。ネ本「きこへ大き

みちやくによせたるあちおそいかなしかふし」。

9ノ3 尚本・仲本・田本「うちちんす」。ア本・ネ本「うちちへす」。

10ノ2 尚本・ア本・ネ本「けわい」。仲本・田本「けわ」。

11ノ9・10 尚本、仲本・田本「やねの年」、「むかう年」。ネ本「やねのとし」、「むかうとし」。

11ノ11 尚本・仲本・田本「よくかほう」。ネ本「よく」の右に「世う」。

11ノ18 尚本・ア本・ネ本「きやめ」。仲本・田本「ちやめ」。

12ノ3 尚本・仲本・田本「世うなおさ」。ネ本「世うなおせ」。

13ノ10 尚本・ア本・田本・仲本「てかち」。ネ本「てから」。

14ノ2 尚本・仲本・田本「けやれけ」。ネ本「やれけ」。

14ノ13 尚本・仲本・田本「めよと」。ネ本「めとよ」。

14ノ20 尚本・ネ本「あかるいに」。仲本・田本「あかるいよ」。

15ノ5 ネ本、「「こせて」の「こ」の右に「着」とある。

16ノ2 尚本・仲本・田本「またたるよ」。ネ本「またゝるよ」。

- 16ノ4 尚本・仲本・田本「まうと」。ネ本「まうて」。
- 17節名 尚本・ア本・ネ本「てやんー」。仲本・田本「はせんー」。
- 17ノ10 尚本・仲本・田本「ちはなれ」。ネ本「ちはちれは」。
- 18、19 ネ本、この2首は欠落している。
- 22ノ1 尚本・ア本・田本・仲本「きこへおわもり」。ネ本「きこゑおわもり」。
- 24ノ7 尚本・ア本・田本・仲本「あかる」。ネ本「あかる あかる」。
- 25ノ5・6 尚本・仲本・田本「やれとむ」。ネ本「やれとも」。
- 25ノ7 尚本・仲本・田本「めやらへが」。ネ本「めやべが」。
- 25ノ9 尚本・仲本・田本「おりよい」。ネ本「おりより」。
- 25ノ10 尚本・仲本・田本「ちこよい」。ネ本「ちこより」。
- 26節名 尚本「みやり」。ネ本・仲本・田本「はやり」。
- 26ノ6 尚本「なかむら」。ネ本・仲本・田本「なりむら」。
- 26ノ7 尚本「なかむら」。ネ本・仲本・田本「なりむら」。
- 26ノ16 尚本・仲本・田本「のきあてれ」。ネ本「ぬきあてれ」。
- 27ノ2・5 尚本・ア本・ネ本「やくめさ」。仲本・田本「やじめさ」。
- 28節名 尚本・仲本「ねいしまいしかふし」。ネ本・田本「ねいしかまいしかふし」。

28ノ1 尚本「いしけくた」。ア本「いしざくた」あるいは「いしけくた」。ネ本・仲本・田本「いし
けした」。

29ノ1 尚本・仲本「いちなはの」。ネ本・田本「いちなわの」。

30ノ3 尚本・仲本「こしらひ」。ネ本・田本「こしらへ」。

31節名 尚本・仲本・田本、無し。ネ本「こばせりきよやりほしやかふし」。

31ノ1 尚本・仲本・田本「みぢよもい」。ネ本「みちよいもい」の「ちよ」の右に「十三て」と記
す。

31ノ3 尚本・仲本・田本「みぢよもい」。ネ本「みてもい」の「て」の右に「ぢよ」と記す。

31ノ7 尚本・仲本・田本「ゆみき」。ネ本「よみき」。

31ノ8 尚本「おとちやん」。ネ本・仲本・田本「おとぢやへ」。

32ノ7 尚本・仲本・田本「たなきよら」。ネ本「ふなきよら」。

33節名 尚本・ア本・ネ本「しらし」。仲本・田本「ししし」。

33ノ5 尚本・ネ本・田本「ようとれか」。仲本「ようとれる」。

34ノ4 尚本・ネ本・田本「あさとれか」。仲本「あさとれる」。

34ノ5 尚本・ア本・ネ本「ようとれか」。仲本・田本「ようとれる」。

35ノ1 尚本・ア本・ネ本「いちやく」。仲本・田本「いちやし」。

36 節名 尚本・仲本「うらおせいおもろのふし」。ネ本・田本「うらおせいおもろふし」。

36ノ3 尚本・仲本・田本「きや」。ネ本「か」。

……（以下、尚本欠落）……

39 節名 仲本・田本、無し。ネ本「ふなやれひやしかふし」。

41ノ2 ネ本「やゝと」。仲本「やしと」「やくと」「やゝと」とも読める。田本「やくと」。ア本「ゝかアモサダカナラズ」という。

41ノ12 仲本・ネ本「あかるいに」。田本「あかいるに」。

42ノ6 仲本・田本「なよかさのてとりちやうす」。ネ本、この一行無し。

42ノ7 ア本・ネ本「ふなはら」。仲本・田本「ふなはし」。

42ノ10 仲本・田本「みなわせ」。ネ本「みなはせ」。

42ノ12 仲本・田本「たつなせ」。ネ本「たづなわ」。

44ノ4・5 ア本・ネ本「きゝや」。仲本・田本「きくや」。

44ノ6 仲本・田本「おきしまに、から」。ネ本「おきしまから」。

44ノ15・16 仲本・田本「かいふたにかち 又かいふたから」。ネ本、この2行欠けている。

右を確認する作業過程で明らかになったネ本の特徴を箇条書きにまとめると、次のようになる。

●ネフスキー本の特徴

- a、最初の一首を除き、うたの冒頭に巻内の通し番号が付されている。
- b、節毎の行分けがなされている。
- c、ア本系の写本に見られる原注（「言葉聞書」）は、まったく付されていない。
- d、ネ本だけの違い、つまり、写し間違いもかなりの数確認できる。つまり、この写本はメモ的なものとして書写されたと考えられる。
- e、ネ本にだけしかない節名が三例記されている。
- g、ネ本には、読点は付されていない。
- h、語句の句切りでは、読点の代わりに空白が用いられる。ただし、仲本、田本の読点の位置と、この空白の位置はかならずしも一致しない。
- i、濁点は、全体的に付されているが、必要と考えられる箇所すべてではない。
- j、節名には、数例を除き、ほとんど濁点は用いられていない。

まず、尚家本で欠落している第三六首以下が記録されており、安仁屋本系統の本であることが確認できる。ネ本の体裁を確認すると、各首毎に巻内の通し番号が付されており（a）、節毎の行分けがなされている（b）ことから田島本に類似していることが分かる。つまり、とりあえず田島本の写しだと

判断できる。一方で、田島本にも記されているア本系統の本に付される原注（「言葉聞書」）は、まったく付されていない。そして、校異一覽で、一重傍線箇所では、田島本よりも上位の写本である尚家本、あるいは（田島本に示された）安仁屋本や安仁屋副本と類似を示す箇所を確認できる。これについては、以下に述べるような理由で、別の写本を見て訂正したといちおうは理解しておく。田島本は、明治二八年五月一七日には親本である「琉球史料本」との校合を終えている。つまり、ネ本が田島本や仲吉本よりも上位の写本であるなら、それ以前にネ本が存在していた可能性を考えなくてはならなくなるが、ネフスキーが日本に滞在していた時期を考えると、やはりそれは考えにくい。

ネフスキー自身が第三者に依頼して書写させたのでなければ、この本は誰かが提供したことになる。ここで、ネフスキーにこの写本を提供した人物を推測してみたい。すでに述べたように、この本は筆跡から見て、ネフスキー自身の手によるものではない。私が調べた限りでは、沖繩関係の研究者でネフスキーと最初に会っているのは、東恩納寛惇である。天理図書館のネフスキー文書には、大正七（一九一八）年三月一日消印の東恩納からネフスキー宛の封書があり、そこにはネフスキーが東恩納が教員をしていた高千穂中学校で「研究」について「発表」したお礼が記されている。¹⁴さらに、同文書には、おそらく大正一一（一九二二）年九月一三日と思われる消印の、末吉安恭からネフスキー宛の封書がある。その手紙は興味深いもので、全文を引用すると、次のようになる。¹⁵

拜啓御手紙披見いたし候 八月卅日午前中御帰宅の由相変らず御研究のこと、存し候

御中城のおもろに出てたるあや、ごの儀早速貴校に御報申上候 右はおもろ御艸紙の第四卷 あお

りやへさすかさのおもろ御さうし第十頁に出つ

きこへおしかさかやちよこたにしらせかふし(節名)

前ありき

一、きこゑさすかさか、よ、そわる、あやこをどり

とよむさすかさか

もり、おとちやは、さたけて

よそわるあやこのふし(節名)

一、きこゑさすかさか、こへやて、おきもやすま

とよむ さすかさか

一 きこゑさすかさか、あまへわちへ、あすひよわ

とよむさすかさか

けおのうちは、をしあけて、さんこおり、つきあけて

しよりもり、おれわちへ

またまもりおりわちへ

あや、こををとりと註しあり 又あそびなといふ語も出づれば踊の意におもろでも使ひ居ることが
知れ申候 されは昔は宮古のみならず 本島にもありしニ覽之申候 右貴急を得申候也 草々

末吉安恭

ネフスキー学兄

これは、大正八（一九一九）年に、宮古島の上運天（稲村）賢敷に会って、宮古島の言葉に関心を
持っていたであろうネフスキーに、宮古島の歌謡「あやこ」について、『おもろさうし』の用例を示
し、沖繩本島でもかつては同語が使われていたことを教える内容となっている。あるいは、このこと
がネフスキーが『おもろさうし』に関心を抱く契機となったものかも知れない。ただ、安恭の筆跡を
他文書で確認すると、ネ本とは異なっている。

あと、ネ本を提供した人物として可能性が高いのは、やはり伊波普猷だということになる。天理図
書館の「ネフスキー文書」には、何枚かの名刺が残されているが、その中には伊波のものがあり、こ

れには「東京都小石川区指ヶ谷町四小笠原方」と住所が手書きで記されている。⁽¹⁶⁾伊波が沖繩を離れて東京（小石川区戸崎町）に生活の拠点を移したのは大正一四（一九二五）年のことである。⁽¹⁷⁾これは、ネフスキーが大阪で生活するようになって以後である。さらに、同文書には、伊波がネフスキーに小石川区戸崎町から送った絵葉書も残されている。⁽¹⁸⁾名刺は、この葉書以前にネフスキーに手渡されたものだろう。これらを見ると、ネフスキーと伊波との関係は大正一四（一九二五）年以後だと推測できる。この年には、伊波の手になる初の活字本『校訂おもろさうし』（南島談話会）が刊行されており、ネフスキーもこれを伊波から贈られた可能性がある。これにより写本は必要なくなり、日本に残したということだろう。

また、『おもろさうし』関係の人物としては、山内盛彬の名刺も残されており、そこに手書きで記された住所は「深川区猿江裏町二九」となっている。山内は大正四（一九一五）年に田辺尚雄に洋楽を学ぶために東京に上京しており、その年の十月には祖父盛熹危篤の報を受け帰省している。また、その次は昭和四（一九二九）年三月に上京して、牛込の雪谷に居を構えたが、この年の九月にネフスキーは日本を離れており、山内に会ったのは、最初の上京の時である可能性が高い。その時、山内は二五歳であった。そして、その三年前、大正一（一九一二）年の八月十七日から一週間、宜野湾間切の安仁屋家に滞在し、王府おもろ五曲六節を伝授され、採譜している。⁽²⁰⁾だが私は、山内が、王府おもろ以外に『おもろさうし』の写本を持っていたということを知らない。

だとすれば、やはりネ本を提供したのは、現時点では、伊波の可能性が高いだろう。だが、田島本を写真したのは、その筆跡から見ても、所有者の伊波自身ではなく、第三者だと思われる。また、校異一覽に二重傍線で示したように、ネ本には、他の写本には無い節名が付されたものが三首ある。10ノ2はその重複オモロである巻22ノ22から、10ノ31はやはり重複オモロの13ノ212から、そして、尚家本には欠落している10ノ39も、重複オモロである13ノ65から補われている。さらに、六カ所だけ、すべて巻13からだだが、やはり重複オモロとの異同が注記されている。こちらでも『おもしろさうし』の「重複」を認識していることになる。田島本には、田島自身の手になる注記が数多く記されているが、これも右の異同以外は反映されていない。当時『おもしろさうし』についてこのような認識を持つていた書き手は誰かということが問題になる。さらに、田島本の上位本をもとに表記を書き改めたのは誰か。あるいは、伊波が指示をして書写させたのか。この辺の事情は、はっきりしない。

さらに、天理図書館のネフスキー文書には、『おもしろさうし』から抄出したノートもあり、これを見ると、巻二、五、八、九、一〇、一三、一四、一五、二二から、巻毎の通し番号を記し、歌詞をおそらくロシア語で訳して抜き出している。また、ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究に保管されている『宮古方言ノート』にも、方言の用例として『おもしろさうし』から、右以外では、巻一七、一九、二一から語彙が引用されている。²⁰『宮古方言ノート』は、宮古語辞典の草稿であり、オモロの抜き書きは、そのための準備だろう。こうして見ると、ネフスキーの手元には、第十巻だけでなく、『おもしろさう

し』のすべての巻が揃っていたと考える方が自然である。そのうちのなぜか一巻だけが、妻イソの実家に残され、その後天理図書館に所蔵されたということだろう。たとえば、伊波普猷が大正一四（一九二五）年に刊行した活字本『校訂おもしろさうし』の準備のために田島本、あるいは仲吉本を写した写本があり、これがそうだと仮定することもできるが、ネ本固有の表記は、『校訂おもしろさうし』には反映されていない。とりあえずは、これは田島本の下位の写本だと考えるのがもつとも自然だが、すでに述べたように、それでは解決できない表記の問題も存在するのである。だが、この写本は、尚家本では欠落している卷十末尾の十首の理解には役立つと考えられる。また、沖繩の研究者とネフスキーの交流を示す記録としても貴重なものである。²³⁾

【注】

(1) 以上は、おもに、生田美智子編『資料が語るネフスキー』（二〇〇三年、大阪外国語大学）の「ネフスキーの略年譜」によった。

(2) 一九七六年、河出書房新社。

(3) 末次「チェンバレンのおもしろさうし」『琉球の王権と神話』（第一書房、一九九五年）また、同「天理図書館蔵『沖繩祭歌』——王堂本『おもしろさうし』解説と翻刻——」（『歌謡——研究と資料——』第五号、歌謡研究会、一九九二年）、同「天理図書館蔵『沖繩祭歌』正誤表」（『歌謡——研究と資料——』第六号、歌謡研究会、

一九九三年)。なお、外間守善・波照間永吉編『定本おもろさうし』(角川書店、二〇〇二年)には、「このチェンバレン旧蔵の『おもろさうし』(英王堂本)は行方が知れない」(『おもろさうし』総説)とあり、さらに、波照間校注『おもろさうし』上(琉球文学大系1)(ゆまに書房、二〇二二年)の『おもろさうし』(上巻)解説」でも同様に「英王堂本」も現在では所在が不明となっているのである。」と記されている。しかし、右のように、天理図書館に所蔵されている。

(4) 注(2)が増補され、『完本天の蛇——ニコライ・ネフスキーの生涯——』(二〇一一年、同社)。注(1)書の存在は、同書の「増補完本あとがき」の「追記」で知った。

(5) https://www.tenri-u.ac.jp/calendar/3fncs0000yfv4e-at/90h_Nevsky_p.pdf (2021.09.06閲覧) なお、同展では、一月二十九日に、「記念講演会」が開かれている。その講演の演者とタイトルは次の通りである。「天理図書館とネフスキー」(天理図書館資料部長 三濱靖和)、「ロシアにおけるネフスキー評価の変遷」(ロシア文化省遺産研究所主任研究員 エフゲニー・バクシエフ氏)、「自筆資料から見るネフスキーの人的ネットワーク」(大阪大学名誉教授 生田美智子氏)、そして、特別ゲストとして、加藤九祚氏(国立民族学博物館名誉教授)とオレグ・リャボフ氏(在大阪ロシア連邦総領事)が参加している。なお、同年には、ロシアでも、生誕二二〇年の講演会が開かれていたことを、北海道大学の、箕島栄紀氏(アイヌ文化史)、谷本晃久氏(北海道地域史)のご教示で知った。そのさい、狩俣繁久氏(元琉球大学)が現地で講演を行っている。

(6) 請求記号は、下記の通りである。[088-Y2-A22](翻刻番号1401)

(7) 以下は、断らない限り、池宮正治「四 テキスト／第一章 『おもろさうし』概説」(島村幸一編『琉球文学総論(池宮正治著作選集1)』笠間書院、二〇一五年)、波照間「十一 『おもろさうし』の原本と書写諸本／『おもろさうし』総説」(外間・波照間編、注(3)書。)を参照した。

(8) 沖縄県立博物館監修『尚家本おもろさうし』全二冊、ひるぎ社、一九七九年。比嘉実編『尚家本おもろさうし』(沖縄研究資料14)』法政大学沖縄文化研究所、一九九三年。外間・波照間編、注(3)同書、には、尚家本の書影がすべて収められている。

(9) 琉球大学附属図書館「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」で公開されている。また、これをすべて翻刻したものに、齋藤郁子「田島本おもろさうし」(『沖縄芸術の科学』第一二号、沖縄県立芸術大学附属研究所、二〇〇〇年)がある。読みにくい田島手書きのノートを、書き込みも含めて活字化した労作である。

(10) これも、琉球大学附属図書館「琉球・沖縄関係貴重資料デジタルアーカイブ」で公開されている。

(11) 西常央の生涯と沖縄研究の関わりについては、末次「沖縄の西常央——近代的沖縄研究への架け橋として——」(『京都精華大学紀要』第三十六号、京都精華大学、二〇一〇年)を参照のこと。

(12) 南西印刷出版部、一九八〇年。

(13) 外間・波照間編、注(3)書。

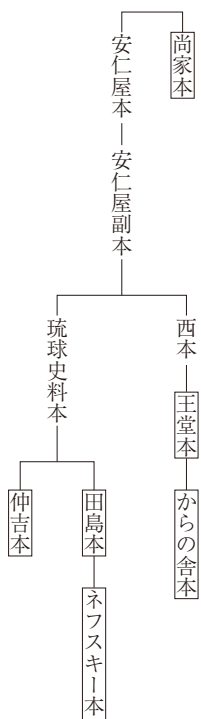
(14) 請求記号「088-12-C2」岡正雄編『月と不死(東洋文庫185)』(平凡社、一九七一年)には、ネフスキーから東恩納寛惇宛の書簡(大正九(一九二〇)年付)が収められており、その中で「却説、おもろに对句とし

て出て来る言葉は、必らず同意味であるといふ事を未だ讚成しがたく思ふ例も御座いますから、……」(一七六頁)と『おもろさうし』に触れる箇所があることから、この時、ネフスキーがこの写本を見ていたことが判る。

- (15) 請求記号「088-42-C21」(翻刻番号1402)
- (16) 請求記号「088-42-D21」
- (17) 外間・比屋根照夫編「年譜」『伊波普猷全集』第一巻、平凡社、一九七六年。
- (18) 請求記号「088-42-C31」
- (19) 請求記号「088-42-D21」
- (20) 以上、山内の動きについては、「年譜」『山内盛彬著作集』第三巻、沖縄タイムス社、一九九三年。
- (21) 請求記号「088-42-B341」これには、一部仮名と漢字で節名が記されている。
- (22) アレクサンドラ・ヤロシユ「宮古方言ノート」における親族語彙「琉球の方言」第四〇号、法政大学沖縄文化研究所、二〇一六年、同「宮古方言ノート」における形容詞「琉球の方言」第四一号、法政大学沖縄文化研究所、二〇一七年。これは同研究所の『宮古方言ノート』の一部であり、すべてが整理されれば、『おもろさうし』からの引用はさらに増えると思われる。
- (23) 本稿の脱稿後、田中水絵『歌の鳥・宮古のネフスキー』(ポーターインク、二〇二二年)を手にした。これにも、天理図書館のネフスキー文書が引かれているが、ネフスキー本には触れていない。しかし、ネフス

キーと沖縄研究を広く知るうえで有効であった。

【『おもろさうし』写本系統図】 ※ □内は現存する写本。これは仮の位置付けである。



【翻刻】

一大ぬしぎや 天とゞろ するやに ゑげ せ
ちまさてちよわれ

又大ぬしぎや あめとゞろするやに
又大ぬしぎや あやこばまするやに
又大ぬしぎや しづこばまするやに
又大ぬしぎや まはへあな に ちよわちへ
又大ぬし 通りのもり ちよわちへ
又大ぬしぎや 国まわり しよわちへ

むかしはちめからのふし

2 一むかしはぢまり や てたこ大ぬし や
きよらや てりよわれ

又せのみはぢまり
又てだいちろく か

又てだはちろく か

又おさんしちへ みおれは

又さよこしちへ みおれは

又あまみきよ は よせわちへ

又しねりきよ は よせわちへ

又しまつくれ て、 わちへ

又くにつくれ て、 わちへ

又こ、らきの しまく

又こ、らきの くにく

又しまつくる ぎやめも

又くにつくら ぎやめも

又てだこ うらきれて

又せのみ うらきれて

又あまみや すぢや なすな

又しねりや すぢや なすな

又しやり は すぢや なしよわれ

あけしのかふし

3 一ぢ天とよむ大ぬし ほしのかた もちろち

へ ちよわれ

又天ちとよむ わかぬし

又や、のみしよ めしよわちへ

又ほしのかたのみき、うび

又せぢまつるぎ さしよわちへ

又こゑかすの なりきよら

又あもと まらしよわちへ

又お、と し、と しきよわちへ

又おくと まうと ふみよわちへ

又なみとゞろ ふみよわちへ

又かさなおり さしよわちへ

又きもき、とうし さきたて

又ほとみたかべ さきたて

又あまおれ大きみ さきたて

又国おれ大きみ さきたて

又天かなし しちやげわ

又てにきよら は しだけり

うらへてはおしかけふし

4 一さやはたけみちやけ ゑよゑ やれ おせ

又そこにやだけみちやけ

又さんこおり あつる

又さんみやあしやげ あつる

又よきのいろの つまぐろ

又ましぢよきやの つまぐろ

又金きやくら よりかけ

又なむちや きやくら よりかけ

又玉しりぎや よりかけ

又玉くみぎや よりかけ

又ておのいと まはるび

又くもこたづな よりかけ

又大きみ の めしよわちへ

又くにもり ぎやめしよわちへ

又よなはばま おれわちへ

又ばてんばま おれわちへ

又浦まわり めしよわちへ

又さきまわり めしよわちへ

又あかるい に あよみわ

又てたかあな にあよみわ

大きみぎやときとやりかふし

5 一大きみぎや いとめつら めしよわちへ

あまへて けわいしよわちへ

※十三、120 しよわちへ みもんとあり

又国もりぎや 玉めつら

又あさとれ が しよれは

又ようとれ が しよれは

又いたきよら は おしうけて

又たなきよら はおしうけて

又ふなこ ゑらて のせて

又てかち ゑらてのせて

大きみぎやいとめつらがふし

6 一大きみぎや 時とやり おれわちへ あま

へて しまより まさり よわちへ

又くにもり ぎや ゑかとやり

又けおのよかるひに

又けよのきやるへ るひに

又大きみぎや しま内どみ めしよわちへ

又くにもりぎや けおのはねうち めしよわ

ちへ

あけしのかふし

7 一きこへせぢ あらきみ だしましとよも

おもかは あがて おわちへ

十三みなさ

十三みよわちへ

わかいきよ いきやて みちやる

又とよもせぢあらきみ

又あさどれかしよれば

しやり

十三 あける月せと、

又ようどれかしよれば

々 なおり月せとし

やり

又いちやきよらはおしうけて

又たなきよらはおしうけて

又ふねこ ゑらて のせて

又てかち ゑらて のせて

8 一、に同じ。

きこへ大きみちやくによせたるあぢおそいかなしかふし

9 一あおりくものあんし ぢやくにしらたる

うちちへす もどれ

又ておりくものあんし

又しよりおやいくさ

又ぐすくおやいくさ

又いたぢや せめつけて

又かなぢや せめつけて

又いたぢや せめいぢやちへ

又かなぢや せめいぢやちへ

又まゝき おいつめて

又てらほ おいつめて

又もゝそ きりふせて

又なゝそ きりふせて

うらおそいおもろのふし

10 一いしてんかおもろ ま人のけわいちよ み

もん

又かなてんがおもろ

又けおのよかるひに

又けおのきやかかるひに

又きこゑあんしおそい

又とよむあんしおそい

又きやのうちあやみや に

又きやのうちくせみや に

又物まいり しようちへ

又てらまいり しようちへ

きこへさすかさかなおせかふし

11 一きこゑこはせりきよ みやりほしや しよう

りの めつらしや さにある

又とよむこばせりきよ

又けおのよかるひに

又けおのきやかかるひに

又あがるいは たかべて

又てだかあな はたかべて

又やねのとし ならば

又むかうとし ならば

又よくかほう ^{世う}するむ

又のちかほう するむ

又しよりもり しられ、

又またまもり しられ、

又あんしおそい にしられ、

又た、みきよ にしられ、

又ひやくさ ぎやめ ちよわれ

又も、と きやめ ちよわれ

きこへこばせりきよみやりほしやかふし

12 一きこゑさすかさか い よけ よう よ

なおせ 世うなおせ

又とよむさすかさか よ

又けおのあけとまに

又けおのあけだちに

又あがるい に みやれは

又てたがあなにみやれは

又むらさきの あやくも

又むらさきの のちくも

又しまなかにねとおり

又くになかねとうり

きこへこばせりきよやれけがふし

13 一としましまおそい や ふれまで こけ

つな やぢよく ゑやれ おそい やぢよく

又きこゑくにせりきよ

又あさどれが しよれは

又ようどれが しよれは

又いたまよらは おしうけて

又たなまよらは おしうけて

又ふなこゑらてのせて

又てからゑらてのせて

あかんおゑつきかかいとりかふし

14 一きこゑこばせりきよ やれ け

又とよむこはせりきよ

又あさとれかしよれは

又ようとれかしよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこゑらてのせて

又てかちゑらてのせて

又しちよきやかたはる に

又まきしやかたはる に

又さゝらなみ たては

又めとよなみ たては

又すづのなり しよれは

又かねのなりしよれは

又もゝそ ほこ もたちへ

又なゝそ ゆみ もたちへ

又もゝそ さだけわちへ

又なゝそ したげわちへ

又あかるいに あよで

又てだかあなに あよで

15 一しよりま人 けらへま人 だりじよ ゆそい

又くすくま人 けらへま人

又たまさ ゑらて さゝちへ

又ゆるい ゑらて こそて 着

又みねまくびり なゝそ たうちへ

又ぎぼくびり もゝそ たうちへ

又これど しより これど くすく

又しよりちよわるあぢおそい

又くすくちよわるあぢおそい

大ぬしきや天と、ろかふし

16 一大ぬしきや せぢあらせぢ しらたる け

に またゝるよ

又大ぬしぎや よどりあすび

又大ぬしぎや まうてあすび

又かせなおすせぢあらせぢ

又うみなおすせぢあらせぢ

又さにしらぬみおねかずおしうけて

又かずしらぬゑそこかすおしうけて

てやんおなちやらかふし

17 一しよりくになるあんし

又くすくくになるあんし

又しよりちよわるあちおそい

又くすくちよわるあちおそい

又けおのよかるひに

又けおのきやかるひに

又大きみはたかべて

又くにもりはたかべて

又かみしもはあとへて

又ぢはちれはろそいて

又いしべつはこので

又かなべつはこので

又いしらこはおりあげて

又ましらこはつみあげて

又なみのうへはげらへて

又はなくすくけらへて

又物まいりしよわちへ

又てらまいりしよわちへ

又かみ も ほこりよわちへ

又こんげんもほこりよわちへ

あけしのかふし

20 一かみがなし かみきよら あおるこがせ

やもどるくも はきやり こがねしま

はちへおわちへ

又のろがなし のろきよら

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこ ゑらてのせて

又てかち ゑらてのせて

あかる三日月かふし

21 一系け あかるいのみづかわ ゑけ さいわ

たるの さくら しけくと おりさちへ

けおより あいいてるむ

又ゑけ てだがあなのみづかわ

又ゑけ あさとれかしよれは

又ゑけ ようとれがしよれは

又ゑけ いたきよらはおしうけて

又ゑけ たなきよらはおしうけて

又ゑけ ふなこゑらてのせて

又ゑけ てかちゑらてのせて

22 一系けよう きこゑおわもり やゑけよう

しま よ うちとり よわちへ

又ゑけ よう とよむおわもりや

又ゑけ よう けおのよかるひに

又ゑけ よう けおのきやかかるひに

又ゑけ よう きこへあちおそいや

又ゑけ よう とよむあちおそいや

又ゑけ よう 大きみは たかべて

又ゑけ よう せたかこは たかべて

23 一きこゑこばせりきよ しよりのめづらしや

又とよむこばせりきよ

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又てかちゑらて のせて

24 一 糸 け あがる三日月や 糸 け かみぎやか

なまゆみ

又 糸 け あかるあかほしや

又 糸 け かみぎやかなまゝき

又 糸 け あかるほれほしや

又 糸 け かみがさしくせ

又 糸 け あかる あかるのちくもは

又 糸 け かみかまなき、おび

しよりくなるあんじかふし

25 一 あれや この かいとり

又 おせや この かいとり

又 てやん おなぢやらの

又 きもちや おなぢやらの

又 おなこあんし やれとも

又 糸とむあんし やれとも

又 めやべ が みしゆ 糸らて

又 しくちや が よそ 糸らて

又 おりよりは するく

又 ちこよりは するく

又 あかきいやこ つくく

又 よすきいやこ つくく

又 とかいふね なて

又 やかいふね なて

はやりほしやかふし

26 一 みなにまちらす が かほう も、糸らび

又 とむにまちらす が

又 とかしきのあかなさ

又 なりむらのあかなさ

又 なりむらのそやけご

又 も、糸らび はおしうけて

又やそゑらび はおしうけて

又せとしない おうね

又ぬししない おうね

又かせむかて わきあがて

又きたむかて わきあがて

又あめふりやり すみあがて

又くれふりやり すみあがて

又おさんだけ ぬきあてれ

又まこちあな ぬきあてれ

あけしのがふし

27 一中べあやのてにきみ ぎや やぐめさす

みとろかね みおやせ

又くもべあやのてにぬしがやくめさす

又あふくものよろいは つみあげて みおやせ

又すゑのすへとみに つみなおちへ みおやせ

ねいしかまいしかふし

28 一いしけしたよう かほう よせつける

とまり

又かねしかねとのよ

又いしへつは このて

又かなへつ はこのて

又いしけ よりなおちへ

又なたら よりなおちへ

又くすぬき はこのて

又やまとふね このて

又やまとたび のぼて

又やしろたび のぼて

又かはらかい にのぼて

又てもちかい にのぼて

又おもいぐわ のためす

又わりかね かためす

しよりになるあちかふし

29 一いちなわのとよみうら あまへほこよる

きよやら

又あらさきのとよみうら

又けおのよかるひに

又けおのきやかるひに

又いなこみや おろちへ

又あらこみや おろちへ

かいふたの大ころかふし

30 一たいらこしらへや おれなおせ かみく

又もりのこしらへや

又けおのよかるひに

又けおのきやかるひに

又がぢやもり に おれわちへ

又ねだてもり におれわちへ

又も、そひちへ おれわちへ

又な、そひちへ おれわちへ

又あまみやふた おれわちへ

又しねりやふた おれわちへ

又しよりもり おれわちへ

又またまもり おれわちへ

こはせりきよやりほしやかふし

十三て

31 一おおみづのみちよいもい おえちへ こう

て はやせ

又ふるさとの ちよみていもい

又みちよいもいか うゑたび

又みちよいもいか あらたび

又よぎけもりどころ

又よみきもりどころ

又おとぢやへ は さそやり 十三 ともからは

ささてとあり

又ちおとちや はさそやり

こはせりやれけかふし

32 一あかんおゑづき が かいとり

又ねはんおゑづき ぎや

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又ふなきよらは おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又てかちゑらて のせて

しらしよきなわかふし

33 一きこゑおにのきみゑ やれしく

しけかけて こがせ

又とよむ おにのきみ

又あさとれか しよれは

又ようとれかしよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこ ゑらて のせて

又てかちゑらて のせて

たいらこしらいかふし

34 一きみなおりわかきみ うらくくと おせ

又きみわかく 大きみ

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよりは おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又てかちゑらて のせて

せしきよかなくすくかふし

35 一しよりいちやくか こちへきよる きよ

らや

又くすくいちやくか

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよりは おしうけて

又たなきよりは おしうけて

又ふなこ ゑらて のせて

又てかち ゑらて のせて

うらおそいおもろふし

36 一まさりきよ か ふなやれ ゑ おきにや

あんしおそいすちよわれ

又うきあがり かふなやれ

又なけち て、 おもな

又あよて て、 おもな

又しもの世のぬしのそろい

又あんし又のあんしのそろい

又まほこりのおなちやら

又すゑつきのおなちやら

又おやのもとかまへ

又あさかもとかまへ

又こうては ゑらたな

又こうては はきよわな

又かくちへ ゑたる

又のすで はちやる

又さけかめ に 入たる

又きみかめ に入たる

くにちやかふし

37 一くめのこいしのか かなやれひやし

又も、うらこいしのか

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又てかち ゑらて のせて

又つきのわか きよらか

又てたのわか きよらか

こかせかふし

38 一くめのこいしのか ぢみちあよむやに

こがせ

又も、うらこいしのか

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又てかちゑらて のせて

又あかずやりおそい

又きみのやりおそい

又あかるいにむかて

又てたかあなにむかて

ふなやれひやかふし

39 一くめのこいしのか くにぢだやか
よ

わかきよ か たまよせ おうね

又も、うらこいしのか

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこ ゑらて のせて

又てかち ゑらて のせて

こかせかふし

40 一くめのこいしのか とりぎや とうとり

又も、うらこいしのか

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又てかちゑらて のせて

かいふたのたごろかふし

41 一ほかま大やこ か や、とおせ やちよこた

又いちへき大やこか

又けおのよかるひに

又けおのきやかるひに

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又てかちゑらて のせて

又あかるいにあよみよわ

又てたかあなにあよみよわ

うちいてはおしかけかふし

42 一あけしの、かみにしや やれけ や、の

やほう あふらちへ

又あけしの、のろにしや

又なよかさのせとちやうす

又そできよらか ゆどりちやうす

又なみのてや ふなはらに しない

又かせのてや ほうふぐろ に しない

又ておのいと は もであわしやり みなわせ

又ておのいと は おしあわしやり たづなわ

43 一よなおさか ゑそこ ゑけやれけ

又かみにしやか ゑそこ

又あさとれか しよれは

又ようとれか しよれは

又いたきよらは おしうけて

又たなきよらは おしうけて

又ふなこゑらて のせて

又てかちゑらて のせて

又うらまわり しよわちへ

又さきまわり しよわちへ

又あかるいにあよみよわ

又てたかあなにあよみよわ

うちいてはさはしきよかふし

44 一きこへおしかさ とよむおしかさ やうら

おちへ つかい

又き、やのおきしま き、やのもいしま

又おきしまから ひるかざり かち

又ひるかざりから 中せとうち かち 中せと

十三 中せちとあり

又中せとうちから かねのしま かち

又かねのしまから せりよさに かし

又せりよさから すすもりに かし

又すすもりにから いかまるに かし

又いかまるにから さちきやもり かし

又さちきやもりから かなひやふ にかち

又かなひやふから さきよた にかち

又さきよたから おやとまり にかち

又おやとまりから しよりもち にかち

十三 おやとまり なはとまり とあり

45 一かいふたのどころ やふらおせ やちよくけ

又かなもりのどころ

又大ころかまみや に